

# 戦後 76 年 未来へつなぐ平和への願い

昭和 20 年 8 月 15 日の終戦から今年で 76 年。時を重ね戦争での出来事や当時の様子を語る体験者が少なくなり、戦争を次の世代にどう語り継いでいくのが課題となっています。

今号では、遺族の皆さんが語る戦争の記憶を通して、平和への願いを未来へとつないでいきたいと思います。



綿引岩雄さん (79)

昭和 17 年 5 月 24 日生まれ。姉 2 人、妹 1 人の 4 人兄弟。2021 年 4 月から八郷地区遺族会会長を務める。趣味はテレビで時代劇を観たり、映画館で映画を観ること。

## 戦後苦しんだ食糧不足

岩雄さんの父・日喜<sup>ひよし</sup>さんは、昭和 20 年 3 月 17 日、硫黄島で亡くなりました。当時 3 歳にもならなかった岩雄さんは、日喜さんの記憶はほとんどないそうですが、出兵の時に、母・よしさんに抱かれて近所のお兄さんと 3 人で神奈川県藤沢市に日喜さんを見送りに行ったことだけはかすかに記憶に残っているといいます。

「うちは農家ではなかったから、苦労したよ。兵隊で亡くなった父もかわいそうだが、母はもっと辛い思いをしたと思う」夜が明けるとすぐ畑に出掛けて、暗くなるまで働き詰めだったよしさんの代わりに、いつも祖母・ゆうさんが面倒をみてくれていたのだそうです。「祖母は正直者で、気持ちがいい人でね。自分はおばあちゃん子だったね。近所の親たちもみんなうちに子どもを預けていたから、賑やかだったよ」と岩雄さんは笑います。戦後を懸命に生き抜いた岩雄さんの強さと前向きさが伺えました。

## 父からの手紙で知った戦地での悲惨な現実

「今はもうないのですが、硫黄島の父から、届いた手紙を読んだことがあるんです。飲み水すらなく、尿をろ過して飲んだと書いてあった」その手紙から、戦地の状況が、どれほど悲惨なものであるかを知った岩雄さん。その後、映画やテレビなどから硫黄島での戦いについてさらに学びました。「硫黄島ではほとんど防空壕で暮らしていた。そこにガソリンをまいて火をつけられるのだから、みんな燃えてしまうよね」役所から届いた日喜さんの死を知らせる通知は紙 1 枚のみだったといいます。

「戦後 15 年、学校を卒業するまでは辛かったね。学校から帰ると、毎日田んぼや畑の手伝い、山から薪を背負って降りてきた。何度も往復するから、

最後には足が震えながら下りてきたよ。戦後はとにかく助け合いだった。今は人と人との接触が減った。誰かと語ったり話したりすることは大事なことなのに」コロナ禍・自然災害の頻発、今あらためて人との繋がりや地域コミュニティの重要性が問われているのではないのでしょうか。



▲硫黄島から義兄が持ち帰ったという岩石



▲軍服を着た日喜さん (当時 39 歳)



上田文男さん (79)

昭和 17 年 6 月 15 日生まれ。生後 6 か月のとき父・定吉さんがフィリピンのミンダナオ島へ出征。2011 年 4 月から石岡地区遺族会副会長を務める。

## 沖縄では今でもジーンと…

文男さんの父・定吉さんは、昭和 20 年 7 月 24 日。フィリピンのミンダナオ島にて 31 歳で亡くなりました。定吉さんは海軍所属で海軍整備兵曹長。横須賀の海軍基地から、船でフィリピンに出征しました。当時、文男さんは生後 6 か月。定吉さんに関する記憶はほとんどないそうですが、遺族会で沖縄を訪れた際、戦死したフィリピンの方向に向かって手を合わせると、ジーンとくるものがあるといいます。

「父が亡くなってからも、農家だったため食べ物には困らなかった。小学校のお弁当でも、みんなが麦飯を食べていたが、自分は白米を食べていて、先生にもたいしたもんだと言われたのを覚えています」その裏には母・志津さんと祖母・つねさんの努力がありました。「相当苦労したと思います。鎌で稲を刈り、小田掛けして、脱穀して…力の要る作業をやっていた。今のようにコンバインもなかったからね。自分も学校から帰ると手伝いをしていたよ」

## 防空壕へ逃げ込むときに聞こえた爆撃音

昭和 20 年 2 月頃から、市内への空襲が始まり、7 月頃になるとアルコール工場（現在のピアシティ石岡がある場所）や石岡駅、石岡農学校（現在の石岡第一高校）、石岡国民学校（現在の石岡小）を中心に市街地への攻撃が激しくなりました。

「杉並小学校のあたりに、親たちが掘った防空壕があってね。府中の自宅や畑から防空壕までかごに背負われて、逃げた記憶があります。その時に背後で爆撃音が聞こえたのは、今でも覚えています」

遺族会では、38 年前から役員を務め、行事にも参加している文男さん。石岡地区遺族会の会員は 234 人（R3.7.7 現在）で、主に戦死者の配偶者や父母からなる正会員は昨年度 0 人となりました。

「戦後 76 年、遺族会の会員は戦死者の子どもから孫の代に変わり、退会する人も増えてきた。戦争の体験をどう残すかという中で、中学生平和大使の取り組みは良いと思う。帰ってきた子ども達と話すときみんな目が違う。やっぱり実際に見てくると違うんだよね」文男さんは続けます。「戦争があったという事実。その後、復興のために努力した人たちがいるから今の暮らしがある」文男さんはしみじみと話してくれました。



▲お宮参り時の文男さんと母・志津さん

## 令和 3 年度 戦没者遺児による慰霊友好親善事業

▶旧戦域を訪れ、慰霊追悼を行い、同地域の住民と友好親善を図ります。

場所：フィリピン（1 次・2 次）、ソロモン諸島、マリアナ諸島、マーシャル諸島、台湾・バシー海峡

参加費：10 万円

対象者：先の大戦で父等を亡くした戦没者の遺児

※日程・申込方法など、詳細は（一財）日本遺族会ホームページをご覧ください。また、相手国の事情および新型コロナウイルス感染症の状況により変更または中止となる場合があります。

問い合わせ・申込先

☎社会福祉課 TEL 23-5569





# 石岡市の平和への取り組み

## 広島・長崎原爆パネル展



日時：8月4日(金)～15日(日) (土日も入場可)  
午前8時30分～午後5時15分

場所：本庁1階メロディアスホール

☎コミュニティ推進課 Tel. 23-7304

## 特設コーナー「戦争と平和」



日時：8月3日(金)～31日(日)

午前9時～午後7時(土日は午後5時まで)

場所：中央図書館特設コーナー

☎中央図書館(月曜・祝日休館) Tel. 24-1507

## 核兵器廃絶平和都市宣言

本市では、「核兵器廃絶平和都市宣言」を宣言しています。

私たちは、戦争のない平和な社会を強く望んでいます。家族や親しい友人と笑顔で過ごす日々そんなかけがえのない生活を一瞬にして奪ってしまう戦争の悲劇なかでも広島・長崎に落とされた原子爆弾の恐怖を私たちは決して忘れてはなりません。

今、私たちは戦争という名の“暴力”を否定するとともに、核兵器を持つ国々が、地球規模の悲劇をもたらす可能性のある武器を使用することなく廃棄することを求めます。

石岡市の自然と恵み豊かな大地を、次の世代を担う子どもたちへと引き継いでいくために、そして、私たちの声が、全世界の人々と結びつき、やがて大きな「平和への想い」へとつながっていくことを願い、ここに「核兵器廃絶平和都市」を宣言します。



## 中学生平和大使を派遣



平成27年度から市で実施している「平和大使派遣事業」。この事業は、市内の各中学校から生徒代表が広島市や長崎市を訪れ、戦争や平和について学ぶものです。新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年度に引き続き、今年度も現地への派遣はしないことが決定されました。今年度については、これに代わる事業の検討が進められています。